

---

# **菜の花満開の道、共に～銀時 + チビ銀日和～**

草紙屋本舗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

菜の花満開の道、共に～銀時+チビ銀日和～

### 【Zコード】

Z8487M

### 【作者名】

草紙屋本舗

### 【あらすじ】

菜の花咲く～のストーリーをもとに、大好きなドラマ『ゴースト～天国からのささやき～』とか、いろんなもんをトッピングしてできたんお話です。チビ銀がフル登場なので、甘味は少ないもののミルク味はちょい多めかも…？なんか銀ちゃん、いいお父さんつぶりをいかんなく發揮しあつて、危うくまたもや惚れ直しちゃいそうになりました…（笑）。チビ銀は、もちろん前回のストーリーの時の中。できればこのチビがもう少し、おおきゅうなつてからのお話も書いてみたいけど、さらにおっさん化が進んだ銀ちゃんを見たい

よつな見たくないよつな…書いてもいなしのに今から、悩んぢま  
す。

さておき、まずは銀ちゃんの男前な父つぶりを、ずずいと満喫い  
ただければ、嬉しいです

電車の窓を小心翼ひ手で持ち上げようとするが、なかなか動かない。見かねた銀時が手を止めると、女の子が口をとんがらせて文句を言う。

「ちちうえは、見てて…」

女の子の顔に令わせるかのように、隣にいる男の子もくべつとうなづく。

「…はいはい、わかりましたア。じゃあ、自分たちで開けてみな?」ふたりのこどもは、よいしょ、よいしょと言いながら窓を押し上げようとする。何度目かの掛け声の後に、ぐぐぐッという鈍い音をたてながら窓が開いた。その途端、心地いい風が車内にいっぱいに吹き込んでくる。じどもたちの髪をくすぐるように風が吹き抜け、その気持ちよさにふたりはきやつ、きやつとはしゃいだ声をあげた。

「ちちうえー、見て見てー、じぶんで出来たのよー」

「はいはいはい、すゞこすゞこね。あーでも、電車の中では静かにしましちゃうね。母上もそう言つていたでしょうがア?」

「…でも、ちちうえー、でんしゃの中にはあたしたちしかいませんよ?」

「はいはい、そういう屁理屈はないのオ。つてか、まアそりなんだけどオね。

いいですかア?これは約束です。勝手に電車の中を歩いたりしないでねエ?危ないからア。

あと、もう一個、大きな声も出れない。つるさいからね。わかれましたかア?」

はい!と黙つてふわつふわくるくるのくせつ毛の女の子が、目をきらめさせて返事をする。隣にいる同じ年頃の男の子は、電車の模型を大切そうに抱えながら無言で頷いた。ふたりとも靴を脱ぎ、座席に半立ちになりながら窓の外を興味深げに見つめている。そん

なふたりのそばで、銀時は窓枠に手をかけふたりの「彼」の様子を見ながら、見るともなしに車窓の風景を眺めていた。

「…ちかづえ？」

「ん？」

「おはなが、たくさん咲いているのよ」

「ああ、そうだねエ。いっぱい菜の花が咲いてンねエ」

「あのおはな、なのはなつていつの？」

「おう、そうだよウ？あの黄色い花は菜の花っしつて、春になるとわんさか咲きまくるお花だよウ？」

「きれいねえ…ひな、はじめて見たのよ」

そう言つて菜の花畑に見入る女の子。その頭を愛しげにくしゃくしゃとなる銀時。ふわふわくるくるのくせつ毛はツイン・テールに分けられ、かわいい髪飾りがついたゴムでまとめられている。その小さな頭をなでながら、しみじみと銀時は呟く。

「なんだかねエ…。あんなに気合をいたのに、ひなには届かなかつたのねエ…サラサラヘアパワー」

「なんか言つた？ちかづえ？」

銀時を見上げるその顔は、銀時そっくりだ。切れ長のきれいな重の目、すっと通った鼻筋。違つといえば、松平片栗虎の言葉を借りるならば“黒曜石のよつな大きな瞳！…よかつた、死んだ魚のよつな瞳じやなくてほんとよかつたよウ！”などころか。黒目がちの大きな瞳で、じーっと下から見上げられると、片の片栗虎は「おうおうおうおう、ひなちゃん、どうしたどうしたア？おじちゃんになにかお願い」とかなア？」とめらめらになる。その必殺視線が銀時を見つめている。

「ん？どしたア？おしつ！」か？

「ん~ん、ちがうのよ。あのねえ、じつじつちかづえの髪の毛は、くぬぐるなの~」

「じつじつって。こやおまえも、たいがいくるぐるですけどオ？」

「あと、じつじつちかづえの髪の毛は銀色なの？」

「どうしてだろ？あんま、考えたことないじなんですナビオ…今、  
答えなきやだめ？」

「だつて、どうしりちやまとか、ナビオちやんとか、これおちやん  
は、くるとかちやころなのに、ちむづだけ変よ？」

「変つて。しかも黙つて聞いてりやア、全部真選組の連中の」とは  
つかじやないのオ。

おまえねエ、いつたい誰になにを吹き込まれたの？  
怒らないから、父上にちやんと言つてみなさい、ちやんとオ。ね

？」

「えとね、かたくり」のおじちゃんが言つてた

「…くそじじイカよ。…つたくよオ」

「じじいじやなくて、おじけやまなのよ」

銀時は舌打ちをしながら、女の子を軽々と抱き上げ自分の膝の上  
にのせる。そうして、自分をつくりだと言われる女の子の顔をのぞ  
きこみながら言った。

「陽菜は父上のくるくるの髪の毛とか、銀色の髪の色、嫌いイ？  
「つづん…ちあづえ、だーい好き！変でもだい好き！ときまつも、  
そうだよね？」

そつと銀時の袖をつかみながら、男の子がにこりと笑つてうなず  
く。そのはにかんだ笑顔を見ながら、女の子を左脇に抱えなおすと、  
銀時は男の子を右腕の中に抱え、ふたりを膝の上にのせた。

「父上もオ、陽菜と時松のことがア、大大大のだーい好きだよオ」

ふたりのおでこに自分のおでこをくつつけるようにしてぐりぐり  
押すと、じどもたちは嬉しくてたまらない感じできやーっと歓声を  
あげる。ふたりのこどもは今、三歳になつた。妊娠がわかり、いよいよ  
臨月を迎える頃、双子だとわかり銀時をはじめとして周囲はお  
おいに喜び、そして大慌てで準備をしたものだ。

最初、すべて手縫いでおしめを作る！と豪語していたお登勢は、「  
双子オ？ならしょうがない…たま！手伝つておくれな！」とからく  
り店員のたまの手を借り、一生分ほどのふたり分のおむつを作つて

くれた。

ふたごの知らせを聞いた“かまつ娘クラブ”のメンバーからは、ふたり分の赤ん坊のおもちゃセットが贈られた。柳生家からもふたり分の武道稽古セットやら、橋田屋からはふたご用のバギーを贈つてもらい重宝したものだ。

そんな風に、大勢から望まれて楽しみにされて、生まれてきたのが陽菜と時松だ。女の子と、男の子の一卵性双生児だつた。陽菜の名前は松陽先生の名前から一文字もらつた。時松も同様、松陽先生の名前から一文字もらい、自分の名前と合わせた名前にした。

時松は母親から、くりくりとした大きな目とサラサラのストレートヘアを受け継いだようだ。けれど口が大層重い。一日中、一言も発さないこともある。周りの大人们はなんやかんやと心配しているが、銀時はあまり気にしていない。なぜなら自分もそうだったからだ。物心ついてからしばらく、必要なこと以外は口をきくことがなかつた。なぜだかはわからない。ただ、松陽先生に引き取られ、先生にいろいろ教えてもらううちにだんだん言葉が口から出てくるようになつた。だから時松もいざれ時期がくれば、話すようになると思つてゐる。定春がとても時松についているのも、安心してい

る。

…動物と仲良くなりるのは、人にやさしくできる魂が育つている証拠だよオ？

それに、こっちの話すことはちゃんと通じてゐるんだし。まあ、なんとかなるでしょオ？

一方の陽菜は、銀時の特徴をすべて受け継いだかのようだ。一重の切れ長の目にくるくるふわふわのくせつ毛。時松とは対照的に、一歳をすぎた頃からどんどん口が達者になつてきた。気が強く、たまに時松が近所の悪ガキにからかわれたりしてゐると、小さな体で相手になつてゐるらしい。同じ頃に生まれた泰三のところの息子、

泰樹とも仲がよく、三人で水泳教室に通っている。しないだも水泳教室から帰つてくるなり銀時にこんなことを言つてきた。

「あのねえ、たいきちゃんのちちうえは、いつも泳ぐのおじい」となの?」

「あ? なんで?」

「だつてねえ、きょうのおむかえのときもゴーグルつけてるから」泰三が机身離さずかけているグラサンのことを水泳時につけるゴーグルと思い、そんな質問をしてきたのだ。泰三にその話をしてもやると、大笑いしていた。最近の陽菜は、ありとあらゆることについて聞きたくてたまらないらしい。何か田新しいものを見つけたり、気づいたりすると「あのねえ……」と質問が始ま。

…おとなになつたよなア。生まれたばつかの頃は、両手のてのひらの上でびーびー泣いてるような大きさだったのに…

それが今では「ちちうえだけ変よ?」なんて言つままでに大きくなつた。いっぱいの口をきこっているのを見ると、嬉しくもあり、そんなに急いで大きくなるな…とも思つてしまう。

超無口とはいえ、時松も同じだ。本が大好きで、いつも本を読んでいる。そのせいか、陽菜よりもちょっとおとなびてているような印象を受ける。何を話しているかは知らないが、定春と仲良さげに本を片手に遊んでいる光景も目にするが、基本はひとりで本を読むのがいちばん好きなようだ。本の中で自分のお気に入りのものを見つけると、それを教えに銀時のところにそつとやつて来る。そのいかにも楽しげな様子を見る時が、一番ほつとする時間だ。

ちょっと前までは、お気に入りのものは魚や動物が多くたが、今は電車が一番のお気に入りらしい。以前、電車図鑑を買ってやつたら、涙を流さんばかりに大喜び。今朝も出掛ける直前まで、その図鑑を持って来る、来ないで母親と押し問答をしていた。図鑑のかわりに電車のおもちゃを一個だけ持つて行くことで納得したらしい…

その時、車内アナウンスが流れた。アナウンスを聞き、銀時がふたりに声をかける。

「お、そろそろ目的地に到着ですよ、おふたりさん？降りる準備をしてください？」

陽菜と時松のふたりは慌てて銀時の膝からすべりおり、小さなりュックを背負つたり、帽子をかぶつたりこまごまとした身支度を始めた。帽子が上手にかぶれなくても、リュックをなかなかうまく背負えなくとも、銀時は手を貸さない。黙つて待つている。靴もきちんと履き直すまで待つ。やきもきはするが、これが銀時の中でのルールなのだ。さつきも、つい手を出してしまいそうになつたが、そこは我慢、我慢の銀時なのだ。

俺が教えてやれることなんて、いくつもあるわけがねエし。  
だとしたら、こいつらがちゃんとひとりの大人として早く自立できるように手助けするのが一番でしょ？が…。

だからこその見守りだ。ふたりがなんとか身支度を終えたのは、電車がホームにすべりこんで停車する寸前だった。

「はいはいはい、降りますよオ」

「ちちうえ、どっちはイ？」

ふたりの手をひいてホームを歩く。海岸沿いの小さな駅は無人駅。ホームの終端がそのまま改札口になつていて。誰もいない改札口に三人分の切符を置き、一步外に出る。

…ぎざん

かすかに海の音が聞こえ、風にのって一瞬、潮のにおいが吹きぬけた。時松がくん、と鼻を動かし、いぶかしげな顔をする。

「時松ウ、今の、なんのにおいかわかったア？」

時松がふるふるとかぶりをふる。

「今のが、海のこおいです。時松は海、はじめてだから知らないにおいだつたかもね」

「うんうん、と大きく時松がうなずいた。

一方の陽菜は、ぐいぐいと銀時の手を引っ張りながら

「ちちうえ、見て見てー！なのはなが、なのはなが！」

と、満開の菜の花畠をして、少々興奮気味だ。

「でんしゃから見るよりおおきこのよー！ちちうえ、早くー！」

「はいはい、陽菜よオ、そんなんに興奮しなさんなつてのー！」

駅舎から出ると、菜の花の鮮やかな黄色と、きれいで晴れ渡った空の青が視界に飛び込んできた。

「まーぶーしー…ちちうえ、す”この色よー？」

陽菜も時松も眩しそうに畠を緑め、鮮やかな色に畠をじばたいている。

「ああああ、おふたりさん？お寺に向かつとしますかね」

銀時はふたりの手を握り、二つもの寺への道へと向かつた。

「ちちうえ？」

「ん？」

「さつきから、ひなたちの周りを、ちょうどちよがずっと飛んでいるのよ？」

「…おオ、そういうやうだね？あつと陽菜と時松にこんちわアつて言つてんじやね」

気がつけば時松の帽子や、リュックサックの上にひらひらと数羽の紋白蝶がとまっている。

「つて、時松？なんか、おめ、ちゅうりみさん方にえりへもててんじやね」

時松の顔をのぞきこんで冷やかすと、ちょっと照れくわいひこせにかんで時松が笑う。

「…ちゅうちゅよ、すゞぐ嬉しつて」

久々に聞く時松のおしゃべりだ。ほんとほおおざさに驚いてほめてやりたいところだが、かえって時松を驚かせてもいけないと思い、銀時は「ぐぐく普通に答える。

「そうかい？他になんかお話してなかつたア？」

「おでらに、ちちうえを待つてる人がいるつて」

銀時はその答えを聞き、ちょっと顔色を変えた。寺に眠っている人のことは母親しか知らず、今日はふたりのこどもには何も話さずに来たのだ。だからそのことを時松が知つてることは、まずありえないのだが…。なぜ、時松はこんなことを？

「ときまつウ、ちちうえを待つてる人つてだアれ？」

陽菜が時松に問い合わせている。

紋白蝶をとまらせたままの姿で、時松は陽菜の質問に無言で首をふり

「わかんない…でも待つてるつて」

「ふウーん、だれだろ？ちちうえ、わかるの？」

陽菜の問いにふと我に返り、銀時ははつとする。

「おウ、父上はなんでもお見通しだからねエ？ついでに言つと、陽菜がア、ゆうべのおかずでピーマンをこつそり残していたことも、時松がお風呂に電車のおもちゃを入れて壊しちゃつたことも、みんなお見通しだからねエ？」

そう言つて、ふたりのこどもを見下ろしながら一ヤリと笑う。

陽菜と銀時は、口をぽかーんと開け畏敬の眼差しで銀時をただただ見つめるだけ。

それにしても、寺で待つてるツツツたらあいつしかいねエのに…どうして時松のやつがそのことを知つてるんだか…ちゅうちゅよが言つてたなんて、まさかほんとに…

「…ここに風景は変わんねエなア」

銀時が思わずあたりを見回しながら、そんな独り言をもらすと、耳ざとく陽菜が銀時に向かって聞いてきた。

「ちちうえは、じょよく知ってるの？」

「ん？ ああ、そうね。おまえたちが生まれるずっと前から、父上はここに来ていたからね」

「ははうえど、いつしょに？」

「こソや、ははうえどこしょに来る前よりもずっと前から、父上ひとりで来ていたつけなア」

「ちちうえ、ひとりでさみしくなかつた？」

「ん？」

「ひなが、ひとりだつたらわみしこのよ・ちちうえ、ひとつでさみしきなかつた？」

陽菜の質問にふと言葉が詰まる銀時。… やうかもしれない、俺はずーっとひとりでこの寺に来ていたが、ほんとは誰かといっしょに来たかったのかもしれない…。

「さみしかつたかもね。でも、その頃の父上はさみしい、つてことも気づかなかつたのかもしんないよオ？」

「どして？」

「ずーっとひとりぼっちだつたかい。誰かといっしょにいるのが怖かつたからしれないね」

「いまもそうなの？」

「まさかアー今は陽菜と時松と、母上といっしょに暮らしていく、最ツ高に幸せだもん。

「みんないつしょで、ほんとに幸せだよオ？」

「よかつたのね。でも、じょどちちうえがひとりぼっちになつても、だいじょうぶなのよ？」

ひなと、ときまつがついてるからーね。ときまつへ。

思わず陽菜の言葉に危うく、感動しそうになる銀時。

そして、陽菜の言葉に時松が「くつと頷きながら、」  
「はまうえがちちうえのことときりこになつても、ひなとせくせ、  
わからえこついているから」

「…おまえたち、ありがとなア…つて…

時松ツ！今、おまえた、わづげなアく嫌アなこと言つたでしょ  
ツ！

父上は聞き逃しませんでしたツ！何それツ？母上が父上の「こと嫌  
いになるつて？」

「何それ、どうこう前提のお話イ？」

「こないだ、とうしほかやんとしようぼうしゃをみにいったとき、  
そつじちゃんと、とうしほかちゃんがそんなお話してた」

「…あいつらア！帰つたら一回シメとくかア？」

…いいですかア、ふたりともオ！父上と母上はすつゝにラブランブ  
だからツ！

おまえたちは知らないだるツビ、ものすいに大恋愛して結婚  
したんですからツ！

そりやア、もうふたりの絆は赤い糸どりか、注連縄ぐらにある  
ンだからツ！

絶対喧嘩別れなんかしませんからツ！

思わずむきになつてしまつ銀時。ふたりの「じもと、ぽかーんと  
銀時を見上げている。

「…まあとにかくだ、父上と母上はおまえたちふたりのことや、み  
んなの」とが大好きですょツてこつのお話ですか」

「…ふ、ふーん」

陽菜が田をまんまるこしながら、相槌をつつ。

「…ふうん」

時松も同じよう田をまんまるにして、頷く。

つたぐ、あいつら、余計な」とばつかし吹き込みやがつてH…。

「ははうえもいっしょだつたら、よかつたのに…」

今日は、時松がずいぶんおしゃべりだ。母親の話が出たら、恋しくなったのか急にさみしげな顔をしてこんなことを呟いた。

「…うん。今度はからずみんな一緒に来ようなア？」

「ひへ、と時松がうなずく。

「ときまつし、あとでははうえの作ってくれたお弁と、食べよ？ ね？」

陽菜が時松を励ますかのように、声をかけている。

「おウ、そ�だそ�だ！」

母上特製の甘くておいしーい厚焼き玉子や、唐揚げ、コロッケ…。陽菜の大好きなつくれも入つていてたつけなア…。それにおむすびがたくさん詰まつたお弁当だよウ？

おッ、お弁当の話をしたら、急に腹が減つてきたなア…。父上だけ先に行つて、お弁当食べちやおッかなア…」

そう言つて、お弁当が入つた手提げ袋を持つた銀時が走り出しそうなふりをすると、途端にふたりは元気になつて我先にと走り出した。ふたりに追いつきそつなふりをしながら、菜の花の咲く道をとつと走つていぐ。行く先には、ひらりひらりと紋白蝶が飛んでいる。

おウ、また今年も来たゼイ？ 今年はふたつこんまいのオおまけつきだよオ？

心の中で、あいつに呼びかけながら、銀時は菜の花の中を走つていつた。

日指す寺に着くと、ひどもたちははあはあ言いながら最後に到着した銀時に向かつて口々に言つ。

「ちちうえの負けー」

「ぼくたちの勝ちー」

ふたりがあんまり嬉しそうに顔つむのだから、銀時は思わず笑顔になりそうになるのを我慢して、残念そうな顔をする。そして悔しがつてみせた。

「残念だ！負けましたア！」

寺の境内入り口のすすぐで手と口を洗い、本堂で桶とひしゃく、たわしを借りる。そして田指す墓碑の前に三人で並ぶ。

「ちちうえ、じーじー？」

「そだよオ、さ、まずまんまんちゃんあーんつてしな？」

銀時の指示に従い、陽菜と時松は神妙な顔をし、小さな手を合わせて目をつぶつている。

おウ、一年ぶりだなア。そつちは変わりはねエかい？

今年は、初めてうちの「んまい」を連れてきてみたわア。女の子が陽菜、男の子が時松ってんだ。双子だよオ？ふたりの名前は松陽先生の名前から一文字づいただいたンだよオ…

手を合わせながら、心の中でそんなことを話しかけていると、こどもたちがおなか減つた！と騒ぎ始める。

「つたぐ、おまえたちつてやつはア！もう少しつてとこの辛抱ができねエンだから！」

「だつてだつて、おなかと背中がペたーんつてなつちやうのよー」

「ははうえのおむすび…」

「はいはいはい、わアりましたッ！じゃあ、ほら陽菜はたわしとか持つて！時松はひしゃくを持つて！お寺の裏手にけば丘になつてツからア、そこで昼飯にしよかア？」

「はーい！」

寺の境内から続く小道に沿つて行くと、見晴らしのいい小さな丘に出た。眼下いっぱいに広がる一面の菜の花畠、そして黄色の花の

中にはつまつと点在している住宅の屋根。花畠の向こうには、小さく細く青い海がちらりと見えた。海側から気持ちのいい風がすいーっと吹いてくる。丘の上のシロツメクサや、クローバーをせわせわと揺らして風が丘を通りすぎていぐ。急に視界が開け、こどもたちは嬉しそうに駆け出した。

「お、おいおいッ！ いろはねよつにしなッ？」

銀時の注意もどこへやら、陽菜も時松も嬉しくてたまらない感じで、草の上ではしゃいでいる。

「ちちうえーはやくお弁当を食べよつよー」

「…おむすび」

ふたりにせつつかれて、銀時は母親心づくしの弁当を広げる。包みが開けられるたび、こどもたちは歓声をあげる。

「ほらもう！ はい、手ふいて！ 時松もはい！ ほらー。」

ふたりの顔を拭き、手を拭いてやり、やつと食事の算段が整つ。「はー、ふたりとも、じはんの前はなんだっけ？」

「ちちうえ、ははうえ、こただきまーす」

早速、大好物のつくねに手をのばす陽菜。にっこりしながらおむすびを手にし、ほおばる時松。

銀時も玉子焼きを取り、ほおばる。

「…うまし。おいしいなア、な？」

「うん！」

「…おこし」

やさしい海風に吹かれ、おいしいお弁当をパクつく三人。おなかいっぱいになつて食事を終える。おなかがくちくなつた後は、こんどは体がむずむずしてくるらしく、陽菜にいたつては銀時に手を拭いてもいたつている最中も、気もそれなりに辺りを見渡している。

「ちちうえ、おこしけしたら、ちょっと遊んできていーい？」

「あんまり遠くまでいかない、って約束できる？」

「ん！」

「時松、陽菜といっしょに行つてくれる？」

「うん」

顔についた食べ物の汚れをきれいに拭いてやると、待ちきれない様子で陽菜が駆け出す。時松も負けじといっしょに走り出す。

「あんまりはしゃいで、すつころんだりすンじやねエよオ？」

「…はーい」

ちよつと離れたところで、陽菜と時松がなにやらべすべく笑いながら遊んでいるらしい。波がはねる…ざわん、といづかすかな音、草の間を忙しく飛び回る虫たちのかすかな羽音、海風がわたつていく時、髪をゆらしていく音…。そんないろいろな音に耳を傾けながら、銀時は草むらの上に仰向けに寝つ転がった。横たわったまま、いどもたちに声をかける。

「陽菜ア、時松ウ！ 悪さアしてねエかア？」

「…してなアーい！」

…あの含み笑いをしている声は、絶対なんか悪さしていやがンなア。やれやれ、今度はどんないたずらをしかけられるンやら…

そんなことを考えながら、空を眺めているとふと睡魔が銀時のまぶたを襲つた。だめだ、いどもたちがいるんだから、眠ツちまつちやだめだツつの…と睡魔に抗つてはみるもの、すつとまぶたをとじられて、心地よい眠りに銀時は吸い込まれていった…

「…銀時ツー銀時ツー！」

「…ンなアにイ？ もオ…あと5分だけツ、お願いツ…」

「だめだつたらー銀時、起きてツ！」

「もう何度もしつけエなー起きるツー起きりやアいんでしょオツ

？」

そう言つなり、自分の声でぱち、と目を覚ます銀時。うたたねをしていたのは、ほんの10分ほどのことだと思われるが、目を覚ますなり、銀時は慌ててふたりの「じもの名を呼んだ。

「陽菜ア！ 時松ウ！」

「…なアーにイ？ ちちうえエ？」

ああ、よかつた無事だった…とほつと胸を撫で下ろす。あぶねエ、うつかり眠っちましたア…と頭をかきながら、半身を起ししながらのびをする。

…そういえば、なんかア懐かしい気持ちで目が覚めたンだけどなア。

なにか思い出せんうで、思い出せない。そんな気持ちを抱えつつ、銀時はむくりと起き上がりっこどもたちの姿を探した。ふたりは思つたよりもすぐ近くで、シロツメクサの花輪や花束を作るのに夢中になつっていた。

「おッ？ ハイカラなもん、作つてンなア？」

「あのねエ、ははうえにもつて帰るのよ？」

「おはな、きれいだから」

「母上、すつごい喜ぶぞオ？ 嬉しくって泣き出しちゃうかもねエ」

銀時の言葉に、ふたりともへへへ…とはにかみながら笑う。

「それにしても、よくこんな編み方知つてたなア？ 誰に教えてもらつたのオ？」

花輪も花束も、しつかりしたつくりになつていて、三歳のこじどもの思いつきで作ることができるような代物ではなかつた。

「ちちうえの知りあいのお姉ちゃんに、教えてもらつたのよ？」

「むかし、せつかくつくれたはなわを、ちちうえにとらねちゃつたことがあるつて言つてた」

…え？ 誰エ？ 誰のこと？

銀時は思い当たる節がなく、いぶかしげにふたりのじじもに田顔で尋ねる。

「……」

「よく、おひつえをはじめられたって。でも音くらこ、やうかえし

たって

松陽先生の塾での仲間は、ほとんどがあの戦で亡くなり、生き残つていて、なおかつ行方がわかつているのは片手に足りるほどの人数だ。しかもお姉ちゃん、といふからには女。女の知り合いなんて、いやしねエ……

……いや、いる。ってか、いた。

「そのお姉ちゃん、どこ行ったア？」

「おひつえを起こしたあと、ばこばこ、つてどつか行ひやけったよ

……？

陽菜の返事を聞き、銀時は顔がひきつりになるのを必死でこらえた。

「どうか行つちやつた……ってのは、お家に帰つたとか、やういうことなのかなア？」

「うん、ひなとときまつこばー、つてしたあと、ふわつて消えた

「ん、ふわつて消えた」

「おいおいおいおい、おみえたちイ？それってエ、なんか変じやない？とか思わなかつたのオ？」

すつかつうろたえながら、銀時はふたりのじじもに聞く。

「普通、人ってHのはふわっと消えていなくなる人はいないでしょ  
うがッ！」

おまえたちつてば“あれ？なんか変かも？”とか“ちよつとおか  
しいかも？”とかって思わなかつたんですかア？ねエねH？「

銀時にそう言われても、ふたりのこどもたちは一向に動じる様子  
も見せず、ちよつと首をかしげてこう言った。

「あのねえ、そのお姉ちゃん、はじめはひょうだつたのよ、ね  
？ときまつ」

「ん、ちよつちよだつた」

「で、ちよつちよだつたんだけど、あたしたちとどうしてもお話が  
したくて、かみさまにお願いしてちよつとだけもとのすがたになつ  
たのよ、つて笑つてたのよ」

「ん、ちよつちよはきっとびつべつするから、おねんねしてもらつた  
つて言つてた」

銀時は混乱する頭の中をなんとか整理をつけるかのよう、わし  
やわしやと頭の毛をかきむしる。

「えエ？ ジヤアなんですかア？」

そのお姉ちゃんまつウのは、あのお寺にいるオレのおななじみ  
のあいつつてわけエ？」

「やうそーーそうなのよーー」

「おさななじみつて言つてた、言つてた」

ふたりのこどもたちは、嬉しそうにうるさいと笑う。

「ちよつえのーじと、とってもだい好きだつたんだつてー」

「死んじゅうときには、そここのそこで会えてうれしかつたつてー」

銀時といつしか知らないことを、こどもたちがあざけない笑顔  
で銀時に話す。

「ちよつえがまことし会いに来てくれるの、ありがとつてー」

「まことしちよつちよになつて待つてるの、知つてた？ つてー」

こどもたちがシロツメクサを手に、せやつせやつと話していくの  
を聞いていたら、しだいに銀時はびくついている自分がばかばかし

く思えてきた。幽靈ッたつて、もとはあいつだよオ？なンも怖いこ  
たアねエ…はずだよね？などとも思えてきて、さつきのうらたえて  
いた自分がアホらしくされ思えてくるから不思議だ。そして、苦笑  
いをしながら、もうじきど頭をわしゃわしゃとかきむしる。

…まいっただなア、おい一まじで、ほんとに余っこりきてくれやつたわけエ？

目を閉じて、海風を胸いっぱい吸い込みながら、吹き抜ける風に向かって心の中で話しかける。

おめで、義理がて工にもほどがあんじやないのオ？

まあ、ちよつと驚こひやこめたかどか？正直、エビヤつめたかどか？

…てましたもんだ、おめでつてやつア。

そう、心の中で面影として残つてゐるあいつの茶田つ氣たつぱりの笑顔に向かつて話しかける。

「おお、どうしたの？ 立つたまま、おねんねしてゐるの？」

陽菜が心配そうに着物のすそをつかんできた。足許を見やると、陽菜の後ろで時松も心配そうに銀時を見上げている。

やおとお詫びしたのよか」

「ふー、内緒。おー」とえーがー二二ツト!!

ふりとふくれつりをした陽菜をひょこと抱き上げると、高い高こをしてやる銀時。そして陽菜をほん、と背中におんぶし、もじしている時松を抱き上げる。

「つしょりと。おウ、おもえたち、ナツイツ重くなつたなア…」

「だつてねヒ、わづわざいなのよ」

陽菜の言葉に合わせるよつて、時松も小さな手で指を三本たてて銀時に三歳をアピールしていく。その一生懸命な様がおかしくて、そして愛しくてたまらない。

…見てくんな？陽菜と時松。オレの子だよオ？ふたじだつてや。陽菜の菜は、菜の花からとつたんだよオ？おめヒのように、やせしくて口づめるやくで、そしてしつかりしてこないうなになりますようにひいて思つてねト…

ふたつのじぢもを胸中と胸に抱いたまま、銀時は荷物を持って歩き出す。

「おうひだ、どけ行ぐの？」

「えー、わせじぶつにお寺のばつあまに挨拶してこいつかなッてなア」

菜の花畠の間にある人一ひとり、やつと通れるくらいの道をたどつて寺まで戻る。そして庫裏で声をかけた。

「…おひおひ、誰かと思つたら銀時さんではなーか。おひへおれなじが」こっしゃか？」

「わ、わあどうぞ、早う中にあがりなされ、わあわあ…」

住職に誘われて、庫裏内にあがる銀時たち。

銀時と住職が話をしている間、陽菜と時松は本堂で遊ぶのを許してもらつた。かすかにふたりの足音や声が聞こえてきてこる。

「…もう何年になりますかな？」

「さあ、数えたこたアないので見当もつきません」

「やうこうお方ですものな、銀時さんとこう方は」

「やついう方なんです、オレってやつは、

そう銀時が答えると、住職は嬉しそうに、ほほほほほ、と笑い出した。いつしょに銀時も笑い出す。

「おやなごたちも、あつと言ひ間にないに大きゅうなつて…。  
こないだ生まれたかと思つておりましたのに…。

毎年毎年の成長、ふりが、ほんに樂しみでなりませんよ?」  
ありがとうござります、と頭を下げながら銀時がはにかむ。

「お父上の氣性をそつくつ受け継いだような陽菜ちゃん、そして大きな器を感じさせる時松ちゃん…。おふたりとも将来が樂しみなことですか?」

住職がお茶で喉をひるむおしながひ、言葉を続ける。

「きつとお母上様のお導きが、大層よろしいのでしょうか?」  
銀時の顔をチラリと見ながら、住職が含み笑いをする。

「もう勘弁してくださよオ、オレだって父親としてやつてゐるつもりなんですか?」

住職の言葉にわざとふてくされたような顔をする銀時。

「すまぬすまぬ…。あの娘さんのお骨と位牌を持つてきた頃の銀時さんのことを見つひと、ほんにずいぶん優しくそして、穏やかになられたと思つてな?

「こつこからかおうじしました。許してくださいや?」

「(?)住職、そのことなんですか?」

「来ましたか?」

「はい?」

「そなたのもとで、あの娘さん来ましたか?」

「…え?いや、來たつてか、あの、オレは見てないつてかア」

鳩が豆鉄砲をくらつたかのように吃驚した顔で、じぶんもびひ返答する銀時に向かつて住職はにっこり笑いかけた。

「数日前に、あの娘さんが夢枕に立ちましてな。もつすぐ銀時さんが、ふたりのこどもを連れて来てくれる。なんだか嬉しいから、今

年はがんばってみるとかなんとか申してこたよつた……？

ああ、だからなのね。

命日のこつた顔をしている銀時を見ながら、住職はまつまつまつまつほと笑う。

「して、どのよつな話をなわこました？」

「いやあ、寒はですね…」

自分はあいつに眠らされて、話をしたのはふたりのじどもたちだけだ、と。じどもたちの話からすると、あいつは嬉しそうにいろいろふたりに聞いていたらしい、と。

そして、帰り際に昔のよつて田分を起して帰つてこきました」と銀時は話した。

「そうでしたか…。なかなか心憎ごとにをされまことに」

住職の言葉に、銀時が頷く。

そこへ陽菜と時松が木魚と木柾を手に手に持つて、駆け込んできた。

「ちひりー、これよい音ができるのよー」

「おつきこ音、たくわーん！」

銀時は慌てて、ふたりの襟首をつかんで叱つつかる。

「仏様にお祈りするときの道具で、遊ぶんじゃねッつの！仏様が吃驚しちゃうでしょっがッ！」

「まあまあまあ、銀時さん、やつそりせりつけなくてても…。おふたりさん、奥でおやつをいかが？」

住職に笑顔で誘われ、ふたりのじどもは元氣よく返事をする。住職の両手にびくびくがり、仲良くおやつを食べに行つた。

庫裏の客間にひとり残された銀時。座卓に頬杖をつきながら、ものいわぬあいづに向かって話しかける。

見ての通り、元氣すきで困つちまつくれHの「じじもたちだ。

おかげで、なんとかすくすく育つてる。

結婚して、夫婦になつて。今度は父親になんかなつちまつたよオ？  
正直、自信がないとこもあつたけど、なんとかやつてるわア。

…ふふ。あのこたぢ、いいこだもんね？

ああ、親の欲目かもしけねエが、ふたりともいいやつなんだア…

陽菜ちゃんは銀時そつくりで…、時松くんはお母さん似なのかな  
ア？

陽菜ちゃん、Ijビもの頃の銀時そつくりで、なんか懐かしかった  
なあ…

…そつかア？そんなに似てるウ？

うん、もうチビ銀つてかんじ、ふふふ。

あ、それヅラにも言われた。

やめろ、つて言つたんだけど、会いにくるたび“よし、チビ銀

！”つて言つんだよ、あいつ。

だから今じゃ、家ではヅラのIjビ銀のおじちゃんつて呼んで  
るもンねH。

…銀時、しあわせなんだね？

ああ。しあわせだ。

…よかつた。これからも精進しなよ？

じゃあね？

遠くで海の音が聞こえる。

はじめてこの寺を訪れた日も、そうだった。

田の前で灯りが消えていくように命を落としたあいつの死に様に、なにもできなかつた自分が歯がゆくて、悔しくて、どうしようもなくて、この寺にあいつのお骨と位牌を持ってきた時は、ずいぶん居丈高な態度で住職に墓を作ってくれるよう、頼んだものだ。

そんな銀時のぶつけようのない怒りをやんわり受け流し、そして見守つてくれた住職にはおそらく一生頭が上がらないだろう。

毎年、あいつの命日にこの寺に墓参に来て、住職とひととき、よもやま話ををして帰る。その留置は、自分が死ぬまで続けようと思つてこる。

ふん、その前にあのばつあまが、くたばつつけまつかもしけねけどな……

何も変わらないものもあれば、確かに変わるものもある。変わるのは、変わり続けながら、きっと最後はもとのところに戻つてこくのかもしれない。

だから、いつかきっと、あいつにもやして松陽先生にも、そして先に逝つてしまつた仲間たちにも会える。

海の音が、じじいなしか大きくなつたような気がする。そろそろ満ち潮の時間だらうか。

そろそろ家路につくか……そつ思い、やおら立ち上がる銀時である。「こよつこりしちつとか……おつー、おまえたちイ、そろそろ帰りますよオー！」

カブキ町に着いた頃は、とっぷり日も暮れて、夕焼け空と群青色の宵闇が混ざり合つた空の色になつていて。直前まで眠つていた陽菜と時松は、少々ぐずりながら田をこすりつつ、銀時に手をひかれ、改札口に向かう。

「ほら、母上が迎えにきてるよォ？」

銀時がふたりに向かつて声をかける。

改札口の向こうには、ここにこ笑いながら彼女が大きく手を振つている。

「ははうえだ！」

「ははうえ！」

それまで、やれ寝すぎで歩けない、だの、足が重くて一步も動けない、だのこねていたのが嘘のような喜びっぷりのふたりである。改札口を抜けると、銀時の手を離して母親に駆け寄るふたり。口々に我先にと今日の出来事を報告しようとしている。そんなふたりをかきわけるように、銀時が彼女にそつと寄り添つた。

「…どうだつたア？」

銀時の問いかけに、にっこり笑つて嬉しそうに頷く彼女。

「そつかーーおおーっし！でかした、でかしたア！」

そう言ござま、彼女を抱きしめ、そのまま抱き上げる。

「ああー、ひちうえ、ずるーいーははうえどだつこしてーー！」

「ははうえ、ははうえ！」

陽菜と時松がふうとふくれているのをよそめに、彼女を抱きしめ、そのおでこに優しくそつとキスをする銀時。

「あーー、ちちうえ、ひなもつ、ひなもつー！」

銀時のうれしげな様子に時松が、何かを感じたようだ。

「ははうえ、なにかあつたの？」

「おウ、おまえたちーよーつく聞きなさいイ？

もう少ししたら、おまえたちの弟か、妹がやつてくつぞオーピーフィア？

だア？

「おどうと?ひなの?」

「こもうと、おとうと…」

「そうです、まだどうちかはわつかんないけど、子分ができるぞオ？」

「こつ、こつくるのオ？ひなのおとうじオ！」

「ぼくは、いもうとがいい」

銀時に寄り添いながら、彼女がふたりに話す。

「クリスマスには、会えるかもね？」

「うわーい、はやく」

「いもうと、いもうと…」

嬉しそうに母親にまとわりつく陽菜と時松。そんな三人の姿を見ながら、銀時はもういちど心の中で呟いた。

ありがとな…。

そんな銀時のつぶやきに応えるかのよつて、宵の明星がカチリと  
あらぬぐ。

「銀時さま？」

「…おウ、や、帰りますかア！」

右手に陽菜の手、左手は彼女。そして彼女の左手は時松とつなが  
つている。

変わらないもの、そして確かに変わっていくもの。ここは、いつもと同じ風景が待っている…。

おしまい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8487m/>

菜の花満開の道、共に～銀時 + チビ銀日和～

2010年10月8日13時56分発行